

# 中国人士の書家山本竟山宛て書簡資料の解説

——関西大学竟山コレクションを中心に——

蘇 浩・黎 菁 予

Interpretation of the Letter Materials by Chinese People sent to  
Calligrapher Yamamoto Kyôzan:

Based on “Kyôzan Collection” in Kansai University

SU Hao, LI Jingyu

Yamamoto Kyôzan, a famous modern calligrapher (1863-1934; real name is Yamamoto Yoshisada; born in present-day Gifu-ken). Kyôzan went to China seven times, supported in many ways by various members of the modern literati such as calligraphers, scholars, collectors, politicians and publishers from Japan and China. This paper interprets letter materials of Chinese people to Yamamoto Kyôzan in modern times. These invaluable letter materials will provide a new perspective for the study of Yamamoto Kyôzan's calligraphy, and also investigate the master-apprentice relationship and literati network between Chinese people (especially the literati) and Yamamoto Kyôzan. Further more, it has also become valuable historical material for the exchange and research of Chinese and Japanese calligraphy.

keyword: Sino-Japanese Calligraphy Yamamoto Kyôzan Literati network;  
Kyôzan Collection

キーワード：日中書道交流；山本竟山；文人交流ネットワーク；竟山コレクション

## はじめに

近代書家である山本竟山（1863-1934、岐阜出身）は、中国に七回（1902、1903、1906、1910、1912、1921、1930）遊学し、また八年間（1904-1912）、当時日本が統治していた台湾に勤務している。その中で、日・中・朝の文人たちと深く交流した国際的な文人書家であった。竟山は近代東アジアの書学と文人交流を研究する上で、欠かすことのできない存在とすることができる。

竟山は明治末に京都へ移ると、多くの子弟を指導し、関西書壇にその名を轟かせた。また、天皇家への上書の代書や、名所旧跡の碑石の揮毫をしばしば依頼される他、金石法帖や書画などを多く網羅・収

蔵していた。このように、竟山は書道家であると同時に、書道の教育家・コレクターという顔を持つ。

さらに、書壇において泰東書道院・日本美術協会・東方書道会・関西書道会などの顧問・審査委員(長)を務め、著作に『昭和元年勅語』、『臨蘭亭二種』、『竟山学古』などがある。他方で、蒐集した碑帖の影印化にも積極的に従事し、書道グループ平安同好会を発足させ、複数の書の展覧雅会を主催・協力するなど、書道界において多大な業績を残している。

2013年から2018年にかけて、関西大学では山本竟山に関連する研究が続けられ、これまで多くの一次史料が集積されている。例えば、関西大学東西学術研究所では「山本竟山とその書学」(2014)、「楊守敬・日下部鳴鶴・山本竟山—近代日本の碑学の源流を探る—」(2016)という研究会が開催された。さらに、関西大学博物館では2018年4月～5月「山本竟山の書と学問: 湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク」という展覧会が開催され、内藤湖南・長尾雨山・富岡鉄斎・藤沢南岳の資料や、竟山の残した佳作やゆかりの作品を展示し、展覧会図録も出版された。なお、同年4月28日に、竟山と交流のあった人々について話し合う国際シンポジウムも関西大学で開催された。

当時関西大学の中谷伸生教授、陶徳民教授、客員教授の(故)大橋成行先生(泰山書道院の院長)による企画の下、2019年6月山本宗生氏(山本竟山の孫)は、山本竟山の資料(史料)を関西大学に寄付され、関西大学博物館に竟山コレクションが設置された。一箇所にまとめられた史料は、利用価値の高いものになっている。近年、筆者は竟山の資料を利用し、単本論文(蘇 2019a: 361-376; 蘇 2019b: 45-58; 蘇 2020a: 67-86; 蘇 2020b: 251-265; 蘇 2021: 81-91)および博士論文を執筆した。

本稿は、まだ解読されていない中国人士が竟山に送った書簡や筆談資料を整理し、国際書道文化交渉や文人交流ネットワークの基礎資料としてまとめたものである。

## 一、中国人の師匠

### 1. 王鶴笙<sup>1)</sup>

1) 余幼時頗好作楷、每有所書、初不自知工拙、不意輒獲賞音。中年遭兵燹、奔走四方、竟小有微名、因此足跡所至、屬書頗不乏人。然率皆以行草応之、以為古人懷素、張旭皆以草書得名、楷書亦不多見、於是遂不復作楷矣。然未嘗不有疑于古人也、及觀張長史『廊官庁壁記』楷書圓勁秀潤、酷類虞永興『廟堂碑』、然後知古人靡不從楷書中得來、始恍悟予之行草能行於世者、亦從楷中得來也。今秋承台翁高誼、慫恿來申、並蒙代刊潤例仿單伝布於大衆、所來委書行草者多屬楷者絶少。冬閑、安甫硯弟忽以楷書千字文諄諄見委、予始而懼、繼而喜之、夫賞識、有真不逐我之末而求我之本、所謂馬逢伯樂而長鳴也。噫今天下之逐末者皆然也、安得尽知安甫弟一起而挽之乎? 書既就、爰志數語於後、以叙其顛末如此。

2) 山本子春仁弟足下。日前託郵便寄上急函二封、諒早収覽、至今未見覆書、深為盼望。信州之遊、究屬何如、成与不成、務望速賜回信与弟、以免滯留名古屋。況弟在即到豊橋一遊、大約二十余日。

1) 王鶴笙、本名は王鍼、1880年に岐阜に滞在した時、竟山(時18歳)は、王に就いて篆、隸、楷、行書を学んだ。大橋泰山(編)(1983)『山本竟山先生 五十回忌追悼記念展図録・作品集』大阪: 泰山書道院。

淹留名古屋、此月筆潤更不佳、総共不及四十金。弟所以難再遲滞、望即惠德音、以定行止。宇佐美兄之信諒送去矣、近日病情如何、一併示我為感、率泐数行、藉詢近安。

友弟王雀笙頓首。四月廿二日。速々回信、弟竚望立等、万不可遲。

## 2. 楊守敬<sup>2)</sup>

3) 謹占本月五日準午後四時、菲酌候光。

荒木先生、謝。方大老爺、陪。藍大老爺、陪。江大老爺、陪。姚大老爺、敬陪。謝大老爺、敬陪。張大老爺、敬陪。杜大老爺、陪。梁大老爺、陪。劉大老爺、謹謝。葉大老爺。陳大老爺、養元。便衣恕速、席設本寓。楊守敬拜訂。

4) 石川、稻垣、丹羽、若林、近藤、渡辺、比田井、柳川以上各聯一副係竟山囑書、曾給潤金者。

一六 中堂一張、聯一副、扇葉一面又『日本訪書誌』一部奉贈。

鳴鶴 中堂一張、聯一副、扇葉一面奉贈。

竟山 中堂一張、聯一副、扇葉一面、古金文拓本五紙奉贈。

振衣 聯一副奉贈。李竹嬾手卷係竟山囑題奉繳。

饒公墓誌二十分、張公墓誌二十分、鄧公墓誌十分、李孝女墓誌五分共五十五分、每分工資八十文、合洋銀五元。鷄毫筆十管並筆筒、共洋銀一元、通共洋銀六元、祈即付來人。

## 二、江南文人の書簡・筆談

### 1. 羅振玉<sup>3)</sup>

5) 代精拓張遷碑並陰全、一張洋八角。

精裱淡拓張遷碑並陰、一部（三十頁四分）洋一元五角六分。

精裱吳篆書大屏幅唐碑記、一本（廿頁四分）洋八角四分。單片特送、下次売每五角片。

精裱楊書白鶴道人記、一本（十四頁四分）洋五角六分。單片特送、下次売五角單片。

精裱翁書楊書屏帖、一本（九頁二分）洋一角八分。

代精拓楊篆書在昔篇、一画洋六角。

精裱在昔篇帖、一本洋四角。

以上言明共計實洋四元九角四分、抄過細賬。

宋拓李陽水書聽松拓本、兩張（每三角）洋六角。

2) 楊守敬、湖北出身。字は惺吾、号は鄰蘇老人、清末の学者である。明治十三年（1880）楊守敬は、清国初代公使である何如璋（1838-1891）の随員として派遣され来日した。楊守敬はこの時、一万数千点にも及ぶ碑板法帖を携えて来日しており、これが日本の書道界に大きな影響を与えた。

3) 羅振玉（1866-1940）、字は叔言、号は雪堂。有名な清朝遺民であり、考証学者、金石学者、書家である。1911年辛亥革命が起こり、家族を引き連れて日本に寄寓し、八年間京都に住んだ。経学・史学に通じ、古典の校訂や甲骨、銅器、木簡などの新資料の研究に従事した。また、書法の研究、特に北碑に対する研究に優れており、北碑に関する『碑別字』という異体字字典を上梓した。

蝴蝶裱聽松拓本、兩本（每兩角）洋四年角。

精裱顧氏過雲樓帖、一部（九本計可七十五頁）洋兩元四角。本照算兩元八角、現讓四角在內。統共前後言明實洋八元三角四分。前抄過細賬本上存留、即請一對為幸。

山本有道先生鑑。代請吉祥。漢光閣主人唐抄。四月廿日上。

6) (封筒表) 日本京都室町下長者通上 山本竟山殿台啓。(裏) 1919.9.3羅叔言。

(正文) 竟山先生閣下。往在東山、遲陪盛饒、醉酒飽德、初感無涯。弟自息駕津沽、忽已逾月、神山回望、依戀如何否。作尊候勝常、定如遠想、願行囊有卸。俗冗紛來、致筆謝稽遲、無任悚歎。比者金風初動、而餘暑未收、當祈珍重起居、以慰遙想。心長紙短、書不尽言。專此為謝、敬問道履、作照察不宣。弟振玉再拜。兪輩侍叩。

7) (名刺) 羅振玉。書き入れ：山本様。周生所次其篆二東奉上、托郵船寄岐阜市中新町武井制紙分社武井助右衛門為叩、費神極慰。運費若干、祈示御。此請竟山先生道安。弟(羅振玉)頓首。

8) 今日小兒外出、不得諱人為恨。苦雨事冗、未得趨前、乃承辱拜謝。此帖在當塗、宋人所刻、前十餘年火藥局姑熟帖中有子美大楷(無右已燬矣)、敬書奉覽。拾之未得、不知小兒置之何處、俟拾得奉覽。春雨、尊體甚健康否。此符先生曾見之否。此簡出於銀簡之二三十年、而外間從來無拓本、僅嚴鐵橋金石跋中一及之而已、吳越王年号。

9) 此古矢鏃之有久字、此以前金石家皆未知矢鏃有久字也。投銀鉛簡、久為人銷燬、一本近直二三百元、伝世多石刻本也。此晷可伝拓、異日以拓本奉贈。湯氏入本朝後、官欽天監之正、專司修曆事。

10) 機輪不損缺但破碎、此乃早間緊要之物。弟尚有湯若望手制日晷、則作於明崇禎時、可奉覽。此晷之図亦見儀象考成中。宗羲、此黃梁州先生、所藏後歸全謝山(祖望)先生。此北京手民技甚精、刻之不精。此湯若望(西洋人)手製渾天儀、敝国内府所藏(中有機輪)蓋能按時轉動、此庚子之乱、為乱兵竊出損壞、此図曾見欽定儀象考成中、不知貴国工人能修繕否。

11) 竟山：王鐸臨蘭亭、四十五歲作。明待宗卷四、王鏞嘉興人、翰林院編修。聽帆樓帖弟未曾見。

羅：此帖石不全已久、其後曾影印、至原拓本之不全者、粵中或得見之。粵中刻帖、潘德畬有海山仙館叢帖収有蘭亭、惟其中真三刻、此後刻稍少。潘季彤有聽帆樓帖、其原石已不全。任氏有南雪金、澄硯閣二帖、石亦不存。葉氏有風滿樓、耕霞溪館、友石齋三帖、耕霞溪館帖石後為孔氏采入岳雪樓、則石亦不全。吳氏則有筠清館帖、歸後梁氏。辛亥間、石亦燬。其後孔氏、易氏、梁氏皆有刻帖、此其較著者矣。

羅：原先求聖教序跋、不過記一時、即知疏漏殊甚、懇求指正詳跋。

竟山：得眼福、感謝感謝。

## 2. 吳昌碩<sup>4)</sup>、鄒王賓<sup>5)</sup>

- 12) 屏、聯均甚下屬屬。大法眼藏家、敬佩敬佩。天菰包漿古雅似遜前、此一枚然亦吹毛求疵之刻論耳。弟俊頓首。
- 13) 地藏尊像極古、背後有文字不？壺廬藏酒、味俊而黍甘、仙露不足以比之。承画之漆匣、擬与先生易葫蘆可否？
- 14) 百花闌、只看数首、風調格律兼到。字細、目力亦不及、容携去細觀。
- 15) (名刺表) 鄒王賓。(裏) 有件寄弟、請寄上海棋盤街宝善齋書莊代收轉交。鳳威。
- 16) (名刺表) 鄒王賓。(裏) 先生日後如尋弟、請問上海棋盤街北首宝善齋石印書莊便知弟之寓處、問道壺先生亦可。朱文方印：慕飛又字鳳威。
- 17) 竟山先生惠鑑。久違雅教、時切馳思、前于敝国正月十一日当覆草函、諒邀清覽矣。邇維文祺萃吉、至以為頌。前懇代求一六先生題蘭冊、務祈鼎力、求獲速寄上海四馬路相近跑馬場第四家。弟立等一六先生冊來成書。盼禱、以肅此奉托。敬請文安、愚弟鄒王賓頓首。

## 3. 哈慶<sup>6)</sup>

- 18) 竟山先生有道。前奉一函、諒呈鳴鶴先生書感情、意図再報青睞。囑購六神丸三元、陳豪九筆花樣不齊、尚缺少二三種、擬隨後補寄。初七日交小包郵呈、当可呈抵尊處也。大小兒韻松在學粵東度歲、二月初可歸上海、弟事粟六、尊囑遲誤、乞原宥為幸。其後仍望魚雁頻通、以慰渴想、專此草々。申復敬叩。道安。教弟哈慶頓首。十一日。
- 19) 弟 七号專請天妃宮橋境東和臣（匯）行。竟山老爺、駕臨宝善街中市順源樓第座、酒聚。幸勿延却是荷。十月五日。少夫頓首。
- 20) (名刺) 哈慶。書き入れ：山本竟山先生閣下並請。闊別多日、渴想甚殷、文駕遊蘇杭、歸來諸多如意。奉請廿八日午刻聚五馬路興館便酌。有吳下徐翰卿先生、籍以聚譚、万望勿却為幸。道安。弟期（哈慶）頓首。
- 21) 初九日午前十句鐘、潔樽候教。假徐園内船厅。恕速。哈慶拜訂。
- 22) (名刺) 鄭積漣。書き入れ：竟山仁兄大人閣下。台從遊鄂、無以為贈、近得吉羅居士行書堂、祈笑留為幸、敬懇轉求楊守敬先生書扇、其潤多寡、即代墊為託。並請道安。小弟慶頓首。廿七日。

---

4) 吳昌碩（1844-1927）、原名は俊あるいは俊卿、字は蒼石あるいは蒼碩、別号は昌石、昌碩、缶廬、大聾、苦鉄などである。篆刻を中心とする学術団体である西泠印社の初代社長を務め、金石や篆刻の資料を収集する研究に打ち込んだ。詩・書・画・印ともに優れた才覚を見せ、独自の風格を誇り、今なお人々を魅了してやまない。

5) 鄒王賓（生没年不詳）、字は鳳威、別号は雲松仙館主人、清末民初に湖北武漢出身。民国年間に『松禪老人遺墨』が編集され、中華書局から刊行された。

6) 哈慶（1856-1934）、字は少甫あるいは少夫、韻松、別号は觀叟、晩年、別号が觀津老人になった。回族、清末民初に南京出身、二十世紀上海の金融界の財閥である。書画鑑賞を得意とし、上海画会の協理を務め、鑑宝と品格の高潔さで知られている。



4. 吳隱<sup>7)</sup>、陸恢<sup>8)</sup>

- 23) (名刺) 吳隱。書き入れ：送文路旭館一号 山本殿 升。送呈花雕垂謹。正請晒存為荷。此請、竟山様刻安。閏月初九。弟(吳隱)頓。
- 24) (名刺) 吳隱。書き入れ：送旭館 山本殿。今日如得暇、請過飯館、訪東瀛日下先生碑、即請竟山先生様、品之附筆問候。(吳隱)頓首。二月十五日。
- 25) (名刺) 吳隱。書き入れ：山本殿。見字即速過我一觀印色。竟山様。弟(吳隱)頓首。
- 26) (封筒) 即托竟山先生持示。敝同研雪廬沈大令手啓。廉夫緘。

(正文) 雪廬老弟同研、近来筆墨牽纏、久不致書左右、甚念。傾竟山先生自日本來、駐申江、与兄為臨池論古之友。談次始悉老弟為人、不勝思慕。今來遊武昌、即索兄一書、為導老弟一見、之後彼此相資、必有傾蓋班荆之樂。而老弟翰墨之緣从此遠矣、先此款引、不吝晋接是幸。同研兄恢頓首。

5. 蒲華<sup>9)</sup>、何頌華<sup>10)</sup>

- 27) 欣聞修竹呼君子、自書花王品牡丹。野客却忘榮辱久、焚香攤卷不去寒。  
自題牡丹綠竹画本、竟山樓中試鶴毛穎書之。朱文方印：秀水蒲華。
- 28) 竟山仁兄有道。閣下時晤道台兄、悉歸国在即、因小病未得來前送行、歎甚。秋冬間可重游沪上耶。附草書一紙為贈、即乞教腕。順候暑安。不尽。弟華蒲頓首。癸卯六月六日。
- 29) 將來我們此風亦漸開了、此意变法之一端也、即如弟在鄉間小兒輩、此時亦要改習西法了。此刻天已漸熱、此地蔡同德堂有小丸痢藥、可順路買幾服、常帶在身。
- 30) 題王鐸字真跡、是否用左右兩狹長条、諸人可題之、將來鑲左右亦為合式。弟之題當預作。
- 31) (名刺) 何頌華。書き入れ：竟山先生台安。蒙孫先生(何頌華、字蒙孫)及石潛是酉刻為客邀席、出去尚未回、愚弟代佈復也。琴山再拜。

---

7) 吳隱(1867-1922)、本名は金培、字は遜齋、号は石潛、浙江紹興人。篆隸に巧みで、特に印は秦漢の古印を蒐集して模学につとめ、近代浙派印人の中でも傑出した一人となった。

8) 陸恢(1851-1920)、本名は友恢あるいは友奎、字は廉夫、別号は狷齋、破仏齋主である。江蘇吳江出身。山水や花を描くのが得意。

9) 蒲華(1832-1911)、字は作英、号は胥山野史など、浙江嘉興人。晩清の著名書道家として、虚谷、吳昌碩、任伯年と「海派四傑」を呼ばれる。花、風景、特に絵竹が得意で、「蒲竹」の名誉をもらう。書も能くし、活発で洗練された運筆が特徴である。

10) 何頌華(1858-1934)、字は蒙孫、号は劍農、詠梅館主など、浙江諸暨人。書法、特に小楷が得意で、風格はすっきりまた秀麗である。紫景書院を創設し、その後諸暨勸学所で署長また図書館の館長を務め、教育事業に尽した。

6. 嚴信厚<sup>11)</sup>、楊復堂<sup>12)</sup>、孫念喬<sup>13)</sup>

32) 初一日準六句鐘便酌候 光。嚴信厚拜訂。三元宮後本寓。

33) 竟山先生足下。榮行在即、未先走送、為歉。前送各集聯全部計十二卷、即請方家晒存為幸。此請道安、並頌行祺。愚弟嚴信厚頓首。七月二日。

34) 山本竟山先生雅覽。教誥大札披聆、一切近維文祺葉吉、以欣遠飲。三橋字冊、前途要緊、消去現下、侯件甚少、另附草單、請鑒。端中丞与足下深知、未知吾翁何日到蘇。念々。如要別件、望示知、陸續取下亦可奉寄、特此寸草奉復。敬請秋安。八月初三日晚。楊復堂頓首。

35) (封筒表) 寄台湾台北南門街甲二号官舍内。呈投山本竟山先生取下。江蘇省城申衙前、孫念喬緘。(裏) 此信取候倘竟山先生在何處、勞神轉交。清国六月初四日封。望即賜回示。

(正文) 竟山先生閣下。前日又九十天托郵便局寄碑帖拓本數十種、並楊福棠處有數種、想已早收入、望乞見示、即寄回示一音、以免懸念之。近日未知先生在台湾何處、信面示明托前處交上一投、回示乞寄蘇城申衙前墨林堂法帖号取下。前寄奉碑帖片本、竟山先生如閱過、合即寄詳擲下為感。不合印、原件退下可也、奉此拜託拜。懇候頌父安、諸希。晚孫念喬頓首。六月初三日。

7. 金吉石<sup>14)</sup>、徐元求<sup>15)</sup>、何文炳<sup>16)</sup>、胡菊鄰<sup>17)</sup>、魯岳瑞<sup>18)</sup>

36) 竟山仁兄先生閣下。昨承枉顧、弟因病未痊、不先走候為歉。委詢敝友處、何鴻舫楹帖、茲已取到、托雲山兄送上、計值三元、合即留之。手此即順、道安。金吉石頓首。六月二十八日。

37) 迅速光陰去不留、平生壯志未曾酬。人情蠶薄真如紙、骨肉無恩視若仇。喜具嘉肴供痛飲、愧無長策挽頹流。家伝只剩殘書卷、莫再蹉跎莫杞憂。右俚句癸卯春日感懷錄、請竟山先生大吟壇点鉄。海上徐元求是草。

38) 癸卯暮春、自申返蘇、於舟次遇日本績學士本山先生由定。筆談之余、各相友愛、因賦短章一絕贈之、聊志不忘云爾、幸勿見哂也。同文難得又同舟、握筆挑灯紀旧遊。從此中原多事矣、願君一枳杞人憂。長州何文炳小圃氏未定草。

11) 嚴信厚 (1838-1907)、書画家、教育家である。字は筱舫または小舫、号は石泉居士。浙江省寧波の慈溪出身。1862年、李鴻章の幕僚となり、その後実業界に転じ、中国で最初の綿織工場や、中国資本による最初の近代的機械紡績工場を設立した。『小長蘆館集帖』12巻を残している。

12) 不詳。

13) 孫念喬 (生没年不詳)、蘇州出身。石碑を刻むのが上手で、石碑帖の鑑定も得意。「集宝齋」という工房を蘇州で開設した。

14) 金吉石 (1840-1917)、本名は金爾珍、字は少芝、別号は吉石、晩年、蘇庵とも号した。浙江嘉興出身、長い間上海に住んでいた。鑑賞、楷書が得意、山水画もでき、題辭と跋も優れた。

15) 不詳。

16) 不詳。

17) 胡菊鄰 (1840-1910)、字は菊隣あるいは菊隣、老鞠、癡鞠、不枯、別号は晚翠亭長、竹外外史、晩年、南湖寄漁とも呼ばれ、別署は不波生。浙江桐郷出身。書画篆刻、詩詞が得意。書道は虞世南、柳公権に師事して、後に漢魏碑版に力を入れた。印章の製作は吳昌碩にも匹敵した。

18) 不詳。

39) 山本竟山仁兄大人閣下。今日走訪兩次、值公出、未得一接清談、至以為悵、同來者石潛、品三琴山諸君也。胡菊瀨留上。閏月朔。

40) 偶然相接古禪開、去來陰濃昼尚白。一笑留君相對坐、歸鴉聲暗雨中山。

錄山寫春雨二首、一贈虛庵仁兄、併乞大正。弟魯岳瑞作生。

## 8. 顧麟士<sup>19)</sup>

41) 竟山先生閣下。別後懷思殊切、夏秋之交、吳中多病、弟賤恙所苦已一月余、至今未復原、甚悶之也。前者暢敘簡慢良多、下懷歉然、曷雲能積。吉旋貴裏後、敬托墨趣佳勝、動定吉祥、至以為慰。奉托鉤帖事、當與令師鳴鶴翁商要、弟望此如大旱之望雲霓、知閣下必有以慰之也、古錦樣一色求。貴、弟每種要三匹、價示下即匯。相知試織之、他日織成、必然佳妙。敝處亦有仿製者、花樣雖可仿佛、而質地松厚、遠不相及矣。總之、織錦質地須薄而光結、花紋須清楚、顏色須古雅（忌紅與金二色）、便是佳製。附去掩扇兩事、一以贈清玩、一以奉鶴翁、求轉呈之。書不尽言、敬祈道安。弟顧麟士頓首。七月廿五。

42) 竟山仁兄先生閣下。夏初晤別、忽又新秋、流光如駛、感慨同深、今夏吳門奇熱、為近年來所未有。尊委畫件、遂至遲遲奉報、日來風雨送涼、塗鴉求教乞。先生與貴友人共指其不合法處則幸甚矣。弟昨見貴邦人畫美人一軸、款題紫仙二字、其人有名否？是否現時人？敬盼示知、囑尋古硯、苦難遇得矣、有可愛之品即當報聞焉。拙畫寄到後、求即賜收條為禱。敬頌道安。小弟顧麟士頓首。處暑前一日。

43) (封筒) 三十六年七月廿一日與鶴逸所語。

(正文)

顧：謹領命。星吾翁藏帖及古碑必多、閣下所見、以何者為佳？請示一二。

竟山：宋拓道因法師、元拓王聖教、弟意此本明中葉以上拓外無佳本、劉屏山詩翰真跡甚好。

顧：冒巢民先生手跡、貴邦重視乎？

竟山：此非紙之原有、乃夾入一即紙印上者也。

顧：碑裱題字是翁覃溪語、李蘇隣從他本錄入者也。此紙名何。

44) 顧：前番至丁香巷潘氏送行、而先生已于清晨出城、登留一名片、敬托貴友轉呈、曾達到否？

竟山：芳意感激感激、貴名片敝友寄來收到了。

顧：閣下到黃州、曾見楊星吾先生否？弟有素冊二紙、曾屬鳴琴室楊福堂呈上、欲煩先生轉乞。星吾先生法書不知能如所請否？弟與星吾先生未相識也。

竟山：聞于星吾翁。貴府有宋拓九成宮佳本、幸許拜觀、望外之榮矣（喜出望外的意思）。

顧：請少坐、弟當取出。星吾翁家漢魏古碑曾見幾許。

竟山：數尤多然、尤舊拓國初乾隆以及之本耳。

19) 顧麟士（1865-1930）、蘇州出身の書画家、收藏家であり、字は鶴逸、西津漁夫、鶴廬主人などと号した。清末著名な書画收藏家顧文彬の孫である。文彬は有名な蘇州園林の怡園を作り、その中の過雲樓を書画收藏の場所にした。鶴逸は怡園を拠点に、書画の同好を集めて定期的サロン「怡園画集」を主催し、吳昌碩はその主要メンバーであった。また鑑識にも優れ、先祖の蒐集をさらに豊かにした。



- 45) 竟山：敝友欲得集古印存一部、於弟托買於上海、搜索更無之。閣下貴友藏此譜、人有無如何？  
顧：是否有金冬心題簽者？  
竟山：不記。汪詡菴集、全部三十二卷、漢銅印与明末姓名集者、非飛鴻堂也。  
顧：汪集又一富人購去、附一已名者是此書否？此書弟有之、貴友如欲得、可以奉讓、直惟命是從。  
竟山：請許拜觀。  
顧：貴友托買、請酌付一宜如絲、竟山先生欣賞則以奉送。  
竟山：不敢当。敝友滑川（姓）、所欲得也、請垂明示。  
顧：請携歸尊寓、直酌付之。弟無二說也。
- 46) 顧：論此書、竟不宜此数（後はなし）。  
竟山：痛神之（後はなし）  
顧：弟日後有書画各件、欲煩先生於貴友處覓其主顧、故於論直不能少涉客氣、万望賞留五枚、至幸至感。  
竟山：為弟破格低廉、無不可乎。  
顧：弟藏字画甚多、皆潔好紙本。涼秋九月、閣下重臨敝邦、可作数日觀。貴友中如有同好者、弟亦可奉讓、弟所好在晋唐宋元人法書墨跡、如有所遇、亦可轉易也。敬求閣下其留意之。  
竟山：敝邦宋元書画亦多、如出逢価不巨、近年絵画旺盛、字幅無価、日本人所写画一幀、貴数千金、尤所喜俗人也。  
顧：敝藏謝時臣絹本大幅画山水、中有鹿百頭、此画弟不欲留、請閣下言于貴邦、如有見愛者、可信致也。日後弟如見有沈南屏之画、当必信告閣下。  
（逆方向の一角にある）竟山：霞蔽虧、葳蕤繁、未泐本。
- 47) 竟山：頗長卷、西京高山寺藏、一本行、一本真。  
顧：閣下回貴邦後、何時再臨敝處。唐人書真跡、敝邦所見甚少、貴邦流轉必多、除写經外有他種否？楊福堂現在申、閣下見之乎？  
竟山：今秋再遊、自河南欲往北京、未決定。  
顧：奉求鈎魏齊墨妙、幸早見示、此外有晋唐賢墨跡、亦求鈎示、不嫌其多。  
竟山：回国与吾師鳴鶴商量、欲早急供鑑。
- 48) 竟山：日人所大喜物也、若許割直請明示告、友人必願割愛。  
顧：弟不知直之多寡、若就敝邦而論、其名不如龍友、千金直否？  
竟山：弟回国告友人。今秋与友人同来中国拜走。  
顧：請觀有憚南田臨元人桃花山鳥図絹本、上有三題、真而好、惜絹少黑、此画在中国不過直百金、貴邦之直願聞也。  
竟山：弟意不下三百金也。唐人及宋人元虞集真跡集為一冊者（写照本也）、近日發兌於帝国博物館、若出以奉贈魏人写經付写照、無謬毫厘。弟此事与鶴翁欲商量。
- 49) 竟山：一昨日、於上海訪上虞人羅叔耘君、此人談偶及魏写經之事、欲得西法写照石印本如何。弟云此事有託顧公、帰国之後与鶴翁商量借出或到智恩院得借、鈎送顧公之處、可往見。

顧：此經一到、即須付刻、以後遍中国之人皆得見魏人妙翰、此皆我竟山先生之玉成者也。

竟山：目前在武昌、端旬齋公（此君藏旧物不少、最妙者為連座之古祭器也）藏古銅器、玉器、書画、見出視其中、有齊人真跡、甚妙、惜木板上所書色黑、難双鉤也。

（裏）顧：有小事失陪。

### 三、江南以外の中国人士

#### 1. 康有為<sup>20)</sup>

50) 茲有要信二函、恐郵局拆驗泄事、特寄來托足下親帶入東京木堂家面交。宮崎之函若不見、則轉托木堂代交可也。有勞有勞、容俟面謝。滿人極愚、不讀書、不通中外之故、万国之性、故人才絕無。即今握大權者、莫為榮祿而於外国性形不知、但却煉兵而已、彼今尚復武科弓刀步石之制可想也。間有一二人、則皆士人無權無勇、故皇上最惡滿人、而滿人亦惡。皇上所以交惡者即以意見相反故也。康有為。

#### 2. 黃志孚<sup>21)</sup>

51) (封筒表) 函復寄上海虹口文路第一号旭旅館内、山本竟山先生台啓。Shanghai 湖北武昌黃寓發。

(正文) 山本由定先生閣下。不見有如三秋矣、渴想為勞、以維遭定綏愉、与时逢吉、為正為慰。往此月五月十四日到滬、十九日忽接内子病危之電、蒼猝來歸。至今猶日与藥鼎為伍也。頃奉手教、藉悉起居、往復去來、交臂相左此矣、假之緣為偕。頃蓋聚首之地邸、丈人仍在此、間月來我敝府擬修改兩湖院、故丈人遷廟甚忙碌、昨囑已代轉致、文衡山書札詩檢出、当与丈人書件同寄滬也、人事促逼。匆匆。希復。黃志孚頓首。七月七日武昌發。

再有請者内子病逝延纏、群医束手、貴邦有初至漢者龍秀君、曾於有人處識韓、聞精於医学、未審与一各端有旧否？現欲假一言為重、為我先客則回天？差有術耳。志孚再拜。

52) (封筒) 敬祈。山本由定先生金陵訪交、張鳳巢公兄惠啓。遜先手肅。

(正文) 鳳巢學長兄有道。不晤者幾何時矣、同是勞人。況瘴難罄、而執事竟以騰達為吾當光。比維君官咸宜、起居住暢以祝以慰。弟奔走十年、依然故我、時事日非、自慚碌々、乃退而服賈、設肆於漢口溷身市塵間、日与大腹者磨牙、無復鄰蘇園中雅興矣、可恥笑也。啓者、山本由定君、日本高士也。与弟為文字交、頃航海至滬、走書相告將為吳越之遊、回攬鍾阜、莫愁之勝。執事善八法、而由定君亦精金石學。弟故樂為介紹、結文字緣。想亦執事所樂聞也、近況何如、仰盼飛鴻、臨楮不勝馳情至、即請升安並候潭祉不具。弟黃志孚頓首。二月廿九日。

20) 康有為 (1858-1927)、字は広厦、号は長素、広東省出身である。日清戦争の敗北から明治維新を範とし、立憲君主政体への変法自強を上書、光緒帝を動かし改革 (百日維新) に着手したが、西太后中心の保守派に弾圧され (戊戌政変) 失敗した。清末民国初期の有名な思想家・政治家・書家であり、特に碑学を深く研究していた。包世臣 (1775~1855) の『芸舟双楫』に倣って、『広芸舟双楫』(1893) を著して帖学を否定し、碑学の啓蒙に努めた。

21) 不詳。楊守敬は、北京で第六回会試 (1880年) の時、東莞進士の黃燮雲に世話になり、三女を燮雲の息子黄志孚と結婚させて姻戚になっていた。

53) (封筒) 台湾台北石防街一丁目三十六番、山本由定殿。上海黄逊先箋上。(1908.12.22)

(名刺表) 山本先生閣下。黄逊先。(裏) Wang Dick Sin。

(正文) 山本竟山大人。席別数年矣、弟南北奔馳、了無善状、去冬不幸又遭先母之喪、倉黃歸粵東故鄉、家貧親喪羅振無計。四壁蕭然、命運之慘亦至極矣。今春強勉拼擋一切、家居無聊、只購得束裝出遊。往歲承友人汲引、於滬上貴國飲事充文案、適有親喪不先就席、今秋抵滬、則署中已有人、遂賦閑至今、欠負累累、乃計無復之。憶往年先生答約同遊神洲三島、籍觀上國之光、以筆墨為糊口茲困極、追思不禁神往、頃聞儀晉齊主言。得先生書、擬來年文駕蒞滬、果爾則至時、乞暢教言、交上海北京路慶順里德豐字号轉交。弟臘初回鄂度歲、來春將重到滬上也。先生其留意焉、俾得側於緒論、以慰數年契濶、喜不知矣。海山遙阻、遠祝起居康強。手此並承、福履綏愉、不去。期小弟黄志孚頓首。中冬二月十四日上海發。

54) (封筒表) 外紙一卷敬祈。飭送駐滬日本領事館呈見章君轉致、山本由定先生台啓為謝。(裏) 光緒壬寅十月初七日拜。

(正文) 山本由定先生大人。如握別後、重溟遠隔、不勝三島神山之想、吾道東來於先生有欣慕焉。往自滬歸、曾奉教帖、当即答問衡山臨山谷書本、擬俟星吾丈書就各件、一併寄上、乃遲之不果、緣我楚督張公政建兩湖教堂、楊丈函籍盡行東閣、而丈亦遂有故鄉之行志、則俗尤不堪。家中病者疊相纏擾日矣、寧晷先生曠懷山水、怡情書畫、此中煩樂、如判天淵耳。頃檢旧篋得衡山書、先行寄贈往者、先生有秋間重渡長江之約、今者長空如水、北雁南飛、不禁伊人之想。貴邦大阪明春有商會之舉、盛事也。至時志如得抽身、行當約伴偕遊、籍拓眼界。知者相遇於月瀨影吉山中、與梅幹櫻花握手為樂耳。一六、鳴鶴兩翁、雖未謀面、而聞風仰慕、晤時希為道意。海國春濃、東風鮮凍、臨楮不勝馳情、並致撰安。鳴照不差。黄志孚頓首。光緒壬寅十月初七日拜。

55) (封筒表) 送虹口文路一号旭館内 呈山本由定先生大啓。長發51号舍黄。

(正文) 竟山先生文幾。頃二下鐘奉訪、忘携居址單、中途迷道迂回数回後、詢於日日館、始得其門而入。時二下鐘有半、而先生已他出、後期之責、深以為歉。擬明日二下鐘再趨聽大教也。并請撰安。弟黄志孚頓首。中廿三。

### 3. 武漢の彭氏

56) 樂大司徒子象之子、宏作旅卣、其眉壽、子子孫孫永宝用。

同治丁卯冬、江夏彭氏鋤地、得古玉卣玩、其款識為春秋時宋戴公四世孫樂氏所作、顧古鐘彝無以玉製者、殆漢人仿作者歟。日本竟山先生雅好書、尤究心金石、爰出示之、極辱賞識、並屬摩撫。予楮墨久荒、手生荊棘、負教多矣。支那彭一卣。

### 4. 福州の某氏との筆談

57) 某：同岑之苔、倍覺欸々、但言語不達、不能傾其積愫。庾公之友、必端人中心藏之矣。

竟山：弟明天動身擬遊中華湖南、湖北、浙江、江蘇、廈門。

某：浙江多名勝之地、西湖最佳。

竟山：弟三年前遊西湖、此景冠宇内者也、欲再遊。北京往武昌二回。弟有金石癖、此次亦為欲購

拓碑墨帖也。

- 某：碑帖陝西最多、有碑洞焉、聚群碑之所也。
- 58) 某：君居武昌見張南皮乎？
- 竟山：端公亦有金石癖、数次往訪、得益甚多。
- 某：晤梁星海太守乎？
- 竟山：見楊惺吾翁乎否？此翁兩湖書院教官、金石收藏尤富。
- 某：君居鄂二年、以南皮為何如人。
- 竟山：在武之時、南皮公在北京。
- 某：清国之文学家也。
- 竟山：在敝邦、南皮公無不知文名者。
- 某：惜其政治尚未能猛進、所詔春秋、責備賢林也。
- 59) 竟山：高見拜服。
- 某：敝國中詞章之毒者二千余年、今日已知其無用、惜教育甚緩、未能普及、政府太無識見、又無能力也、可嘆。
- 竟山：不敢当。
- 某：詞章之毒人如鴉片、嗜之者皆聰穎之士也。耗無用之精神、殊可惜耳。
- 60) 竟山：台北丸便乘往長崎、而後向上海、明天午後四時開往長崎。敬問福州呂西村及伊汀州（伊墨鄉）分書有否？
- 某：呂偶有之、伊則少矣、伊偽者多、真者拱壁之價。僕歸矣。
- 竟山：主人云、請緩話。
- 某：君子古陶亦知音者乎？有貴国人在福州、購清国旧陶而得日本新陶、為人所欺、可笑之至。
- 61) 竟山：貴府福州城内在何街？
- 某：城内南後街光祿坊。
- 竟山：他日拜走領教。聞閣下嗜陶磁器、收藏太富。
- 某：嗜此近二十年矣、則無俄之害矣。
- 竟山：青磁雨過天晴色者現下有乎？
- 某：僕有一瓶徑三尺高尺半、惜缺其口、恐係明代仿製哉。
- 竟山：希世之珍也、北宋窯乎？
- 62) 某：其設色則以真珠寶石之屑為之、故能甲於全球也。今日西人購以重價、可說有目者也。近年、究無書可考、大概人死則芸絕、秘不相傳、清国故習也。
- 竟山：可惜可惜。
- 某：固人工之巧亦財力之足。
- 63) 竟山：有紅錦窯（琉璃均窯）者、此器出何省何州？
- 某：山西均州。底有「長方形マーク」、乃作凹形者。
- 竟山：敝邦價太貴、多仿製耳。耳食之徒以貴價。
- 某：僕於鋪上觀之倣者、不及購偽。

竟山：貴国朝制陶、乾隆道光何以為第一？

某：康熙為上、乾隆雍正次之、道光不足道矣。當時財力富盛、御窯不惜工費、一画匠年得数千金。

64) 竟山：白磔香爐、江西省德化县窯景德鎮。

某：此明代物也、上中下三種、此爐猶非上者。上者色白、中帶黃如脂、如猪脂之潤、其黄色略如鳶羽。一中瓶五百元、無可購也。

竟山：中国欲製陶研究、見何書可也乎？

#### 四、差出人不明の書簡

65) 李鼎和精選絳羊屏筆、(四〇〇) 小一枝。

賢李鼎和、短鋒一枝。

日本鳴鶴先生清賞、長鋒一枝。

静遠山莊屏、對筆、吳吟軒、(一〇〇〇) 一枝。

智禮、吳吟軒 (七〇〇、八〇〇) 二枝。

日下鳴鶴先生清賞、吳吟軒、長一枝。

右客中、収手、七枝 (一二〇〇)。

騰蛟起鳳、楊二林堂、一枝。

楊二林堂精選長鋒、小一枝。

右山中、収手、二枝。

静遠山莊屏筆、吳吟軒、(二〇〇〇) 二枝。

李鼎和精選絳羊屏筆 一枝。

右留守宅來三分三枝。

計十二枝。

66) 北京：宝熙、字瑞臣、又号沈龔。大憇水井胡同。景賢、字朴孫。弓弦胡同内牛排子胡同。袁勵準、字珏生。東華門北池子路北。天津：方若、字藥雨。

上海：沈曾植、字子培。王国維、字靜安。愛文義路大通里路吳興里三九二号。

67) 昨枉駕、殊簡褻、歉甚。先生此遊樂乎？内地蕪穢、湖山無主、想不足与三島神山比耳。杭之丁家、蘇之潘家、向以収藏名。先生曾有所見否？往者弟遊杭、居于汪子勇家、為時匆促、未暢所欲也。

68) 鹿門先生光緒九年於此匆々一晤、此後雲海茫茫、不久已十九年矣。前年因貴國中炯含山遊歷湖南、始得彼此一通音、罔然愛而不只悵何如之。老令年八十一矣、恕此生不能見也、筆書至此、淚亦隨下。宋時真淨禪師住持于此、宏揚曹洞宗旨、貴国有永平禪師實得法于此。国祖有僧在此充首座、光緒初、貴国僧在此住者多又有玄松上人在此住念仏堂十年始回。去年有東洋僧來寺盤桓數日未卜興、駕相識否再、駕由何處而光降請教法名。弊寺大和尚今明日可回、留盤桓數列也。婦人在此做仏事七天。

69) 竟山先生閣下。月前大貞丸同舟獲識荆顏、筆破未落、緣実三生、羨君風雅、相見何晚、欽佩欽佩。到蕪後、祇因俗冗弗及修雁、而想念之忱未嘗忘耶。君抵鄂後近居何處、旅址可好。頗念。僕宦幕久遊市儈、乍領持箸乏術、嫁線勞人、魚魚鹿鹿、祇增慚愧。現於初六來滬、本行房屋權、租中国街内



大碼頭正街刻、尚料理襄修、約在月底開張也。前承詢及蕪湖有名金石、茲取購藏之。唐朝李陽冰鐵線篆一付奉上、以踐前諾、幸完存、相隔一水、郵羽甚便、倘承厚我時惠佳音、可勝盼幸。炎暑將臨、旅中珍衛万千、因風授簡、不尽朔雲、即頌旅祺。名另具、光緒二十八年五月初九日。

70) 笑我城南号醉叟、折腰無意上官途。千秋計已歸流水、一種禪猶索野狐。壳家濟貧非偶爾、求仙飲酒豈何愚。生平不省風塵事、唯愛帘前松六株。六松居即事。小年。醉叟始定。

哀絳声里易魂消、私語伝々話昨霄。一夜紅樓人似玉、月明簾外索吹簫。旧作一章重録、供山本方家一笑。即致小年。醉叟。

71) 攀川落俸誤佳期、情種未消悔已遲。草滿晴郊染深露、風吹煙柳淡幸好。鳥遽在外影三疊、人去棲頭遂一枝。十歲春光尋旧夢、瞥過半醉半醒時。春日偶成孤山醉書。

72) 万里頓首啓。夙聞芳名而無繇一聆声咳、常以為遺憾。偶縁於事通竿牘、伏冀賜將來携掖焉。頃日、岑楼子寄書報先生入京、且曰先生欲緋僕秘藏玲本、速致之焉、乃附郵此物、頃於僕属、不用幸緩覽、禿穎不尽中藏、惟希鑑葵傾。玄月念四日。竟山先生。函文。

### おわりに

本研究ノートでは、山本竟山と中国人士らが残した書簡・筆談資料72枚を整理・積読した。それらの中には、彼らの交流ネットワークが分かる記述や、彼らの葛藤を吐露するような内容も含まれている。

明治時代に入り、多くの日本書家は、中国文化（楊守敬の来日）と西欧文化との衝撃を受けながら、自らの書の存在価値を探求するようになった。書家・収蔵家・書道教育家である山本竟山は、このような時代背景の下で、中国に七回も渡り、当時日本の植民地であった台湾で長期勤務し、台湾の書道教育と普及に尽力していた。

その中で生まれた竟山と中国人士のネットワークは、単に文墨趣味を伝えるのみならず、近代、特に明治後期及び大正期の日中文化交流の一面をも示している。竟山と中国人士の書学活動は、個人史と時代史の交錯の中で展開されたものであり、日本書道史の枠を越えた大きな価値を持つことになろう。歴史の波に埋もれ、失われた資料は少なくないが、なお数多くの書簡史料が、今現在に至るまで竟山の書学を伝えている。

### 参考文献

- 関西大学「山本竟山の書と学問」展示会実行委員会、関西大学博物館（編）（2018）『山本竟山の書と学問：湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク』大阪：関西大学博物館。
- 陶徳民・中谷伸生ら（編）（2019）『山本竟山の書と学問—湖南・雨山・鉄斎・南岳との文人交流ネットワーク—』大阪：関西大学東西学術研究所。
- 大橋泰山（編）（1983）『山本竟山先生 五十回忌追悼記念展図録・作品集：日本近代書道の先覚者』大阪：泰山書道院。
- 香取潤哉（2006）「昭和書豪山本竟山—日本治臺時期旅臺書家研究」修士学位論文、台湾芸術大学美術学院造形芸術研究所。
- 杉村邦彦（2014）「大正癸丑の京都蘭亭会と長尾雨山・山本竟山：関西大学図書館内藤文庫所蔵の書簡を中心として」『書

道文化：四国大学書道文化学会誌』10：27-50.

蘇浩（2019a）「吳昌碩と山本竟山の文人交流」『東アジア文化交渉研究』13：361-376.

——（2019b）「山本竟山と和漢法書展覧会」『書学書道史研究』29：45-58.

——（2020a）「近代日中書学交流の一側面：山本竟山と楊守敬を中心に」『関西大学中国文学学会紀要』41：67-86.

——（2020b）「羅振玉と山本竟山の文人交流—書簡と筆談を中心に」『関西大学東西学術研究所紀要』53：251-265.

——（2021）「書簡が語る日下部鳴鶴と山本竟山の師弟関係」『東アジア文化交渉研究』14：81-91.

——（2019）「近代東アジアの書学と文人交流：山本竟山（1863-1934）の事例を中心に」博士学位論文，関西大学東アジア文化研究科.

[付記] 本稿は、中国国家社科基金芸術学青年項目「近現代中国書画在日本的流播研究（1880-1945）」（20CF180）の支援を受けたものである。

[追記] 2018年4月～5月、関西大学博物館にて「山本竟山の書と学問」展覧会が開催された際、大阪泰山書道院長であった大橋成行先生は、山本宗生氏との連絡から寄贈品の入庫まで、大変尽力されました。当時、関西大学博士後期課程に在学していた筆者は、参加者の一員として、竟山資料を調査・撮影するため、大橋先生と一緒に山本宗生氏のお宅を数回お尋ねしましたが、その際、数々のご高配を賜りました。大橋先生は令和3年2月16日に永眠されました。改めてご冥福を心よりお祈り申し上げます。

